

特別養護老人ホーム
ぬまづホーム

小山恵美・山田有里

はじめに

- ・日本ノーリフト協会（代表：保田淳子氏）
「私はあなたを持ち上げられません、でも私は私のハートを持って伺います」

- ・技術の習得→現在はできている
しかし...

ノーリフトの理念が伴っているのか？
意識の視点から振り返ってみた



利用人数・特徴

現在（平成25年6月）

- ・平均介護度 4.00

- ・10人

- 床走行式リフト7人

- スタンディングアシスト3人

特徴

- ・大柄

- ・抱えての移乗が難しい

- （抱えにくい、拒否が見られる、立位困難）

- 以前は二人介助で移乗していた

導入2年目のアンケートでは・・・

リフトについて肯定的な側面と

「時間が足りない」

「機械の介護では温かみがない」

職員意識の中に

リフトに対する賛否両論

機器導入途上における意見・意識のズレ

今回の職員アンケート、質問1
リフトを使用する事に対してどう思っているのか？

メリット

- ・身体負担軽減
- ・利用者の危険・怪我のリスクの軽減
- ・利用者の離床機会が増えた
- ・二人介助を一人でできる

デメリット

- ・時間がかかる
- ・狭いところで使うのが大変
- ・「リフトを使用していないやや重たい利用者を抱える時、以前までは平気で抱えていたが重く感じる」
- ・介護技術が低下している気がする

質問2. リフトの使用が定着する前と比べ、意識に変化はあったか？

- ・職員間で意見が言い合えるようになった
- ・慣れるに従い扱いがスムーズになった
- ・入居者のニーズに合ったケアを提供する手段が増え、何が出来るか考えるようになった
- ・リフト使用が普通になってきている
- ・最初は面倒だったが今では必要不可欠
→逆にリフトがないと介助が困難で困る

2年目と現在のアンケート結果から意識の変化の視点で

職員意識の中では
あまり定着していなかったリフト・・・

「リフトの使用が当たり前になっている」
「リフトがないと困るし不安」

肯定的な意見が大多数を占め
“あたりまえ”に使うリフトに職員意識が

変化

「トイレに座らせてあげたい」

→移動介助で腰痛
骨密度が低い
→本人・職員、

葛藤

が高い！

リスクがあるし・・・

床走行式リフトを使用！

自分のために
作られたリフト

疾病・身体特徴・入居・食事・

身体特徴・入居・食事・

入居・食事・

食事・

食事・

食事・

食事・

食事・

食事・

食事・

社会参加
意欲向上
QOL拡大

身体の特徴もはるかに
身体の小さな子たちに
抱えられるのは
怖かった

その結果...

車椅子で過ごす時間が増え
QOL拡大・双方の安全確保が可能となり
葛藤が解消された

利用者と共有できる
良い体験の蓄積

3つの仕組み

職員教育

- ・継続的な勉強会の実施
- ・リフトコーディネーターの計画的資格取得支援

仕組みづくり

アセスメントからケアプランとして実施までの利用者支援の継続的サイクルの実施。

物品面

- ・機器の整備と提案、新製品への絶え間ないリサーチ
- ・計画的なリフト等の機器の導入

意識・意欲を低下させる要素として...

- ・「リフトを使用していないやや重たい利用者を抱える時、以前までは平気で抱えていたが重く感じる」
- ・「介護技術が低下している気がする・・・」

**職員の中で
不安が生まれている！**

考察及び課題

- * 今まで抱えられた利用者も重く感じる
- * リフトを使わないと移乗介助が出来なくなる

介護技術の低下への不安 → 意識の否定的変化

ノーリフトを拡大させてきた経過の中で起こってきた「重さ」の感じ方の変化は、「重さをあげない」というノーリフトの考え方に近づいていると捉えられる。又、介護技術の低下への不安は、利用者個々へのアセスメント能力を高め、利用者の持てる力の活用が技術の高さであると意識を変えていく必要がある。技術の習得とともにノーリフトの考え方をしっかり浸透定着させていかなければならない。